

病気の出ない時期をねらって作る

野菜の種類によって作り分ける堆肥



大根畑で、大平さんの作付けの工夫などについて聞く参加者

大平勝さん(右)と報告者の相原成行さん(中央)



落ち葉の堆肥置場

報告 ● 大平園芸 見学会

2013年4月18日

共催

神奈川県有機農業研究会
東京都有機農業研究会

神奈川県有機農業研究会会長／食農研

相原農場

相原成行

3種類の堆肥

約30名の参加者が集まった4月18日の見学会は、神奈川県鎌倉市手広にある大平園芸で行いました。大平勝さんは有機農業に取り組んで40年のベテラン有機農家で、日本有機農業研究会の有機農業アドバイザーでもあります。

大平さんの畑は5か所で合わせると8反弱になります。この畑での野菜づくりに欠かせないのが3種類の堆肥です。まずは落ち葉堆肥。これは集めた落ち葉を1年間かけて仕上げたもので、落ち葉に付着する土着菌を利用して、何も混ぜずに作ります。

次に稲わら堆肥。これは夏野菜のために作っているそうです。混合する資材を変え、3種類の稲わら堆肥を作っています。油粕を入れたものはナス、ピーマン用、魚粉を入れたものはトマト用といったように作り分けているそうです。最後は鎌倉市が生産する堆肥ですが、こちらも1年間ねかせてから使用するそうです。

経験40年！ 栽培技術の数々

畑は3か所見せていただきました。大根、絹さや、スナップエンドウ、長ネギ、じゃが芋、玉ねぎ、カブ、ホウレンソウなどたくさん野菜が元気に育っていました。作付けでもさまざまな工夫がありとても参考になりました。

基本は、「病気の出ない時期をねらって作る！」だそうです。ほかにも、玉ねぎの定植は1か所2本植えにする。じゃが芋は2

月上旬植え。一本ねぎは坊主を切り落とす、新芽を定植する。などなど、話がいくらでも出てきます。

しっかりと堆肥を作り、土の性質も知り尽くした大平さんは、じゃが芋、玉ねぎ、里芋、大根、トマト、キュウリ、ナスなどの主要野菜は、まず失敗しないで作れるそうです。40年の経験の大きさを感じました。

大平さんの自宅や畑は住宅地の中にあります。以前、世田谷の大平博四さんが「街中の農地が有機農業に適している」と言われていたことを思い出しました。大平さんの有機農業を支えている消費者は2グループに分かれましたが、今も40年前から変わらずに支え続けています。

セツト野菜を配達するグループ。直に取りに来るグループがあります。ずっと変わらずに大平さんの野菜を食べ続けている消費者の方々、大平さんの作る野菜だけでなく、大平さん自身に惚れ込んでつながっているのだなと感じました。

有機農業がつなげる人と人、経験を積んだ栽培技術を見せていただき、本当に勉強になりました。今回、見学会を引き受けていただいた大平さん、参加者のみなさん、本当にありがとうございました。

大平 勝（おおひらまさる）プロフィール

1937年生まれ。「かまくら土の会」と出会い、有機農業を始めて40年になる。耕作面積は約80a、安全と味にこだわり、野菜の多品目栽培をしている。

提携の消費者グループは、「かまくら土の会」と「手広グリーンメイト」。神奈川県有機農業研究会会長、日本有機機農業研究会神奈川大会実行委員長を歴任。日本有機農業研究会幹事。

【連絡先】〒248-0036 神奈川県鎌倉市手広3-13-16
☎ 0467-31-7405 FAX 0467-33-0506

2013年4月1日に、つぎの5名の方が、
第2次有機農業アドバイザーに認定されました。

魚住道郎さん（茨城県石岡市）／林 重孝さん（千葉県佐倉市）
並木芳雄さん（埼玉県和光市）／館野廣幸さん（栃木県野木町）
相原成行さん（神奈川県藤沢市）

佐藤喜作のキサクな話

人畜共通

60年前の話で恐縮。まだ敗戦間もない時で、何とか復興をと青春の夢をたぎらしていた。そんなときに、モデルとして浮かんできたのがデンマークである。

彼の国も敗戦で豊穡な2州をドイツに取られ、外に失ったものを内に取り返そうと荒地を畜産で豊土にし、今では世界一の幸福な国と言われている。

当時、農村青年農業実習生の第1回の派遣があり、応募して渡欧した。デンマークは島国であり、唯あるのは起伏する国土で地下資源皆無、山もなく雨量もわずかであるから川もない。

したがって農業も麦、馬鈴薯、根菜、牧草であり、日本の米に該当する国民の主食は、馬鈴薯。ところが豚の餌も馬鈴薯であるのに仰天した。人間様が豚並みか。何か人の威厳を欠いた感じであった。何も人畜平等でもあるまい。

今、日本では、減反対策の一つとして餌米が栽培されているが、食用と餌用とどんな違いがあるのか。これが今日の農の軽視、農村の蔑視に繋がっていると思うと唖然と禁じ得ない。

その故でもあるまいが、最近やたらと人畜共通病が流行し、放射能と合わせ深刻な危機を迎えた感じである。世界は飢えているのに、人は動物の食には馴染めないし、生きてゆけない。

農することに誇りと人間としての威厳を失わせられ、滅法悲しくなってしまうナア。